
道ゆき

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道ゆき

【Nコード】

N9896M

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

雨のなか、ひとりの男が歩いている。

犬が一匹、門の前でいつまでも座っている。そうして、犬は倉田に助けを求めている。

春雷シリーズの倉田光太郎を主人公にした、BLではない短編。

灰色の雨にすっぽりと覆われた路上を、男がひとり歩いている。白いポロシャツに色あせたジーンズ。激しい雨脚に、雪駄を履いた素足も裾も濡れていた。

「よく、降る」

男はちよつと立ち止まり、傘を傾けると空を見る。うんざりした表情で見上げる男の視線の先にあるのは、湿つて重たい雲と雨。ちらりとのぞいた顔は、全体的に鋭く骨太なものだ。歳の頃は三十代の後半ぐらい。肩幅が広く、上背があつて堂々とした体格をしていた。

男は、どこにでもある小さな町の風景を歩いている。車が一台、やつと通れるような細いアスファルトの道の両脇には、ブロック塀や生け垣が並んでいた。長屋造りの家並みもあれば、マンションや建売住宅もある。玄関先に置かれた犬小屋、放りだされたままのオモチャ、買い物かごを前後につけた自転車などが放置されて、雨に打たれてうるさく鳴き、紫陽花や梔子も、首を垂れている。

男がこの町にやってきた頃は、景色はまだ冬のもだった。家を囲む塀からのぞく樹木は葉を落とし、北風が吹くと寒そうに枝を震わせていた。しかし、いまはみな青々とした緑の葉を茂らせ、色鮮やかな花を咲かせて、むせかえるような青臭く甘い匂いを立ち昇らせる。

通りは、静まり返っていた。中途半端な午前中の時間帯のせいか、雨のせいかわ、誰ひとりすれ違う人間はおらず、いまこの瞬間には、男と雨しか存在しない。

いや もうひとつ。

男がしばらく歩いていくと、それが見える。この半年間というものの、男はアルバイトの行き帰りにそれを目にしてきた。

一匹の、犬だ。薄茶色の毛に覆われた中型犬で、耳の先っぼだけ

が白かった。

それはいつでも、ある家の門の前におなじ背筋を伸ばした「おすわり」の姿勢で正座し、門の向こうにある庭と玄関を見ている。男には以前、その家をしきりと人々が入り出ていた記憶がある。そして、以来ずっと犬の姿を目撃していた。犬は、ときどき家に向かって悲しそうな細い声をあげた。いまも、雨に濡れそぼったまま、頑固に門の前から動かずに鳴く姿を目にして、男はあまりの切なさにとつとつ今日、無視出来ずに声をかけた。

「おまえも、辛抱強いものだ」

犬が、驚いたように首を上げて男を見る。だらりと地面についていた尻尾が、一、二度ゆっくり動き、立ち上がると向きを変えて視線を合わせてきた。濡れたふさふさの尻尾が水しぶきをあげながら勢いよく振られ、ひらいた口からピンク色の舌をのぞかせて、ハッハッ、と息を吐く。その表情はまるで、嬉しくて笑っているように見えた。

男も、あたたかい微笑を頬に刻んで見下ろす。犬の尻尾がますます勢いを増して振られ、なにかを訴えるように鼻面を、男と門のあいだで往復させる。男は犬のつぶらな瞳から視線をはずし、門の向こうにある雨にけぶった風景を見る。眉間に小さなしわを刻み、ため息をついて男はもう一度、足元にいる犬を見下ろす。犬も見返してくる。ひとりと一匹を、雨音が包みこんだ。

そして男は、まるで犬と会話をしていたかのように頷いた。

「仕方がない。入れてやろう」

犬の尻尾が、さらに回転を増す。嬉しさのあまり、その尻尾をプロペラにして空を飛びそうな勢いだ。

男が上体をかがめて門の上から内側に手を伸ばし、鍵をはずして「さあ」とあけてやると、待ちきれなかったように犬はするりと庭にすべりこんだ。トトツ、と数歩。ふと思いついたように犬が男を振り向く。

「門はこのとおり、元に戻しておく。いいか、追い出されるな」

言葉どおりに門を閉じ、男は振り返りもせず歩き出す。表札の名前は、友町となっていた。

そして夜、雨がすっかりあがったその道を、男はまた歩いている。今度は、ひとりではない。同行者がいた。長袖の青いスポーツシャツにスラックスという格好の、痩せて背中が丸く曲がり、足をすこしひきずった老人だ。犬を連れていて、それは、例の犬だ。老人の持つ引き綱の先で歩調を合わせて歩き、ピン、と耳を前方に立てて尻尾をくるりと巻き上げた姿は意気揚々と、午前中に男が見かけたときとは様子がすっかり違う。あの庭つきの家の持ち主は、この友町老人であるらしい。犬の、友町を見上げる様子は、大事な主人を気遣っているようにみえる。

「タロウ。前を見て歩きなさい」

友町が注意すれば、犬は安心したようにまた、前方に鼻面を向ける。

男と、友町を先導する格好でタロウがおり、まるで仲のいい父子が犬の散歩をしているかのような情景だ。雨あがりの濡れた路面は黒々とし、街灯や家々から漏れる明かりをぼんやりと反射している。「ところで、あなた……お名前は、なんとおっしゃいましたかな」

友町が、ふと傍らを歩く男を見上げて問う。

「倉田。倉田光太郎と言います」

「そうそう、倉田さん。もう、僕ぐらいの歳になりますと、一度ぐらいじゃ覚えられませんか」

かまいませんよ、と倉田が答えて、ちらりと笑顔を見せていた。どうやら、元からの知り合いというわけではないらしい。しかし、見知らぬ者同士のあいだによくある、よそよそしさや緊張感はなく、なごやかな雰囲気が漂っていた。

「どこまで、なにを、話しておりましたかなあ」

友町が言う。痰が喉にからむのか、それとも呼吸器系を患ってでているのか、ときどき友町の喉が、ゴロゴロという音をたてた。

になつて、照れ隠しなのか分厚いレンズの眼鏡をはずして、目をこすった。

「歳は、僕より三つ下なだけですけれども、なんだか娘のままのところはまだ、ありましてねえ。たいへんな面白がり屋なんですよ。僕があんまり喋らない夕チだもんですから、家内のおかげで家の中はいつでも明るい感じがします。若いころはねえ、今日みたいに雨が降ったりしますとね、駅まで迎えに来ていたりしました。せつかく傘を持って来てくれたのに、僕はありがとうも言わずに、スタスタ先に歩いて帰ってしまった……。当時は、恥ずかしかったんですよ」

思い出せばいまでも恥ずかしらしい。友町は、ちょっと感情の始末に困つたような表情になり、それを紛らわせるためか手にしていたステッキを、強くアスファルトについていた。一瞬、夜の道にひとの足音を乱すリズムが響く。そこに、明かりのついた民家の窓から子供の笑い声が降ってきた。友町は足を止めて、声のした方を見上げる。倉田も一緒になつて、レースのカーテンがかかっている窓を見た。

「子供が、欲しかったですねえ……」

友町は、窓を見上げたまま小さなため息をついていた。

「僕は家庭が寂しかったから、子供はたくさんおればいいと思つておりました。しかし、恵まれませんでしたから、まあ、夫婦二人でも仲良く一緒にあればいいかと、家内と話しました。そのくせ僕は、仕事一辺倒の面白味のない男でねえ。まあどこが良かったものやら、今まで二人でやってきましたよ」

友町は顔を戻すと、ふたたび歩き始める。友町の足元で、いつの間にかおすわりをしていたタロウも、腰を上げると歩き出す。友町はそれを見て、声をかけた。

「なあ、タロウ。おまえは、お母さんが拾ってきたんだつたなあ」
タロウが、くると首だけ振り向けて、返事をするように一声吠えた。

「どうです。タロウはまるで、ひとの言葉がわかるようじゃありませんか、ねえ」

タロウを自慢する友町の顔は、相好を崩してしまつてとろけそう。友町の世代では、妻を自慢するより、飼い犬を自慢する方が気分的に楽であるらしい。その様子ときたら手放しで、幾らでも話せるようだった。

タロウの、話しかけると首を傾げて見上げるしぐさや、マテの姿勢でいつまでも伸ばした前足に顎をのせて待っている姿、台所に立つ妻のそばでおこぼれに預かろうと見上げている様子を、友町は飽くことなく話す。

「僕の世代では、犬は外で飼うのがあたりまえで、ごはんなども、ねえ。ほら、人間の食べ残しでいいなどと、当時は思っておりまして」

そして友町は、ある台風の夜にタロウが鎖を切つて逃げてしまった話をする。

「庭で飼つて、一年ほどですか。雨も風も、雷もひどくてタロウは怯えてしまったんでしょう。堤防が決壊するかもしれないというんで、僕は夜中に何度も様子をにご近所の方々と出かけて行きました。明け方帰つてみればタロウの姿がどこにもなく、家内と二人であちこち探し回ったものですよ。当時はまだ、犬取りがありましたから、もう、生きた心地もしないような感じで、僕など仕事を一日休んで、ずいぶん遠くまで探しました」

そうして「タロウ、タロウ」と呼びながら、自転車であちこち探しまわっていて、空き地にある土管の中から飛び出してきたタロウを抱いたとき、家の中で一緒に暮らすことに決めたのであるらしい。「この子はもう、僕たちの本当の子供じゃないかと思つたものですよ」

友町が足を止めて腰をかがめると、タロウに手を伸ばす。タロウがその手に顔を押しつけて、気持ち良さそうにクウ、と鳴いた。

いつのまにか、周囲は澄明な夜気につつまれて、頭上からは中天

にかかった月が、穏やかな光で足元を照らしていた。倉田の隣で友町は、ときどき眼鏡を外して、目をこする。しよぼしよぼと瞬きをくり返し、しみの浮いた手の甲でゴシゴシこする。

「どうなさいました」

それに気づいて、倉田が声をかけた。

「いや……。歳のせいですかなあ。どうも、景色がぼんやり、見えにくいようで」

「いっそ、お外しになったらいかがです」

言われて、友町は逡巡する。眼鏡を外すと、衰えた視力のせいで歩けなくなるのを知っている。が、もう一度うながされて、試しに眼鏡をかけないままで周囲を見回した。その面に、かすかな驚きが走る。パチパチと瞬きをし、ちよつと目をすがめると遠くの電柱に貼られたチラシに焦点を合わせていた。

「倉田さん、どうも、あのチラシは最近出来た、駅前の鍼灸院のじやないですかな」

カメが首を伸ばすように、友町は顔だけ前に出した格好で言う。

そのようです、と倉田が肯定すると、へえ、と友町はあきれたように呟いていた。そして、次には月を見上げてため息をつく。

「今夜はまた、なんとも怖いような月がかかっておりますなあ」

友町は倉田に向かって少年のような笑顔を見せ、眼鏡をズボンのポケットにしまうと、歩きながらあちこちに視線を向ける。嬉しいらしい。ちよつとウキウキした様子が、友町の足取りに表れている。歩調が軽くなって、数歩あるくたびに手にしているステッキを、くると回した。そんな様子を、倉田が微笑とともに眺めて、一緒に夜の道を歩く。タロウの足取りも、軽かった。

二人と一匹は、もう、ずいぶんと歩いている。人工の光が造りだす影は、そのときどきで長さや向きを変えてしまいが、月の影は離れない。皓々と輝く満月が照らす道は明るく、影は足元のすぐそばでうずくまり、ついて歩く。

静かな夜だ。普段なら、真夜中でもトラックが往来する広い国道でさえガランとして、車一台すら通らなくなっていた。

「なにやら、寂しいですなあ……」

友町がふと立ち止まり、虚しく点滅している信号を見上げて呟く。それは、規則正しく黄色いライトを点滅させて、濡れた路面に彩りを添えている。国道の中央分離帯では、等間隔に並ぶオレンジ色の照明が、辺りをぼおつと明るく染めていた。友町は、自分の周囲を何気なく見回して、「なあ、タロウ」と同意を求め。そして倉田が、そんなひとりと一匹の様子を、やはりやさしい眼差しで見つめていた。

「いつもは、こんなに遠くまで、散歩に来ないんですけどねえ。心配させますから」

「誰がです」

倉田が言つて、友町を見下ろした。

「そりゃ、あなた、うちの家内に決まっつい……」

答えかけて、はっとしたように友町は驚いた表情のまま、倉田の顔を見た。忘れていたことを、友町はいきなり思い出して呆然とした。

「そうでした。いや……そうでした。どうして、僕はこんな大きなことを忘れておったんでしょうなあ。倉田さん、僕の家内はもう、ずいぶん前に亡くなっておりました。あれは、僕が定年退職をして一年経たない夏でしたねえ。気候がよくなったら、のんびり温泉にでも行こうかなんていう話をしておりました。暑い夏で……急に具合が悪くなって、救急車を呼んだけれども、とうとうそのまま。日盛りの下、庭の手入れをしておりましたが、縁側にいた僕の目の前で急に倒れて……」

その先を思い出して、悲しみが胸に広がったらしい。友町はちょっと俯いて足元を見る。俯いたままにいる友町を、タロウが見上げとクウウ、と鳴いた。

「それは、お寂しいことでしたね」

倉田の言葉に友町は、こくり、と頷く。それはもう……、と言いかけて、足元のタロウを見下ろした友町の目は、二度目の驚きに大きく見開かれる。引き綱を握っている手が、こまかく震えた。

「タロウ……。そうだ、おまえも」

友町の手からステッキが離れて、カラン、と地面を打っていた。

「く、倉田さん。僕は家内と二人、このタロウを庭のモミジの下に埋めてやりました」

恐怖にまっしろになった顔で、友町は傍らに立つ男を見る。友町がそこに見つけるのは、相変わらず労わるようにやさしい倉田の微笑みだ。

「怖がることはない。ご老人、あなたは誰もが通る道を、これから歩こうとなされているだけだ」

友町の前で、倉田が大きく腕を広げていた。その背後は一瞬にして闇に包まれ、さつきまで、確かにそこに存在していたはずの信号も消え、道路も消え、分離帯の照明さえ消えて、残ったのは月だけになった。

「これは、また……。いつたい、どうしたことだ」

友町には、まるで闇が世界を一瞬にして飲み込んだように思えた。しかし恐怖は不思議と遠い。闇の中でも、倉田とタロウの姿は内側に光源を持つように明るくて、友町は魅入られたように眺め続ける。これからなにが始まるのか、と激しい好奇心と驚きに彩られているその顔は、もはや老人ではなかった。眼鏡も、ステッキも、必要がない。白髪頭はふさふさの黒髪になり、しみの浮いていた手は働き盛りの力強い男のものだ。

「これはまた、どうしたことだ……。あなたはいつたい」

呆然とした口調で友町が呟けば、倉田が「私はね」と答えていた。「私はね、ときどき誰かが自分を呼ぶ声が聞こえるんです」

「……声が」

「そう。そしてまあ、たいていは困っている」

言って、倉田が苦笑する。

「いろんな事情で、行くべき道に困っているのが普通です」

「困っているのですか……」

おうむ返しに呟いて、友町は腕組みすると心当たりを探すように、首をかしげる。

「ご老人、あなたではない。困っていたのは、彼だ」

倉田の目が、足元を見る。その視線を追った友町は、小さな声で「タロウ」と言った。

「おまえ、なにか困ることもあったのか」

腰をかがめ、友町はタロウの目をのぞきこむ。その頭上に、倉田の軽い笑い声が降る。

「それは、困るでしょう。タロウはあなたを迎えにやって来たにも関わらず、いつまで経っても気づいてもらえないまま、家の門の前に座って鳴いていた」

友町は、倉田の言う意味がよく飲み込めない。

「あの、倉田さん。僕はどうかしたんでしょうか」

「あなたはね、ご自分がもはや現世の者ではなくなったことに気づかないで、思い出の家の中で暮らしておられた。だから、タロウはどうしても家の中に入ることが出来ず、困りきって鳴いていた。それで私はとうとう手を貸したが、どうも、あなたは」

倉田が、いまにも大声で笑い出しそうな表情になって見下ろしてくるのを、友町は黙って見返すばかりだ。

「どうもあなたは眠ったままでお逝きになって、それがあまりに自然すぎて目が覚めても……」といっても、もはや肉体はそこに横たわったままであったでしょうが、魂はそのままひょっこり起きだしてなにこともなかったかのように、いつもの生活を送ったようです」

言われた瞬間、友町は顔をくしゃっとバツが悪そうに歪めてため息をついた。自分が死んで、それに気づかないというのは、たしかにバツが悪くても仕方のないことであろう。

「タロウ……おまえを困らせて、悪いお父さんだったなあ」

それにしても、と友町はタロウを撫でてやりながら、自分は毎日

タロウを散歩に連れて歩いたし、餌をやり、そして妻の手料理を味わいながら会話を交わしていたのに、と思う。ただの一度も孤独であったことはなく、それが不思議で倉田に伝えてみれば、やはりあたたかい微笑が返ってきた。

「それは、ご老人。あなたの中では誰も、本当には死んでおらず、生きていたからでしょう。が、そのせいでタロウはあなたになかなか会えなかった。なにせ、あなたは自覚がなく、あの家の中で奥様とタロウと幸せに暮らしてらっしゃった」

友町は、腑に落ちた表情になって頷いた。

「たしかに、そうでした。僕は寂しいなぞと、ここしばらく思いもしませんでしたなあ。それで、その……倉田さん。僕はその、いつ頃死んだのでしょうか」

「さあ。およそ半年ほど前でしょう」

「……半年！」

友町は飛び上がって叫び、つぎには大きなため息とともにがっくり頭を垂れた。

「どうしました」

倉田が、問う。

「いやあ……半年。僕もずいぶん間抜けなことです。半年も、気づかないとは。それならもう、僕はある家でいいかげん腐っておりますなあ。臭いが漏れて、ご近所のみなさんにご迷惑をおかけして、その上またいつか僕を発見するどなたかは、とんでもないものを目になさるわけでしょう。ああ、もう、なんとお詫びを申し上げればよいものか」

友町の言葉の上に、倉田の可笑しそうな笑い声がかぶさっていた。

「ご心配なさらずとも、それはありません」

「な、なぜです」

「現実の世界は、一人暮らしのあなたを置き去りにはしませんでした」

町の人々がちゃんと友町を発見し、葬儀を済ませている、と聞いた

て、友町はほつとした。

その友町の耳に、聞き覚えのある音色が聴こえてきた。遠い昔に聞いた、楽しい音色。

倉田の背後が、しだいに明るさを増してくる。倉田の姿は暗さを増して影になり、まばゆい光が次第に近づいてくれば、それは心弾むような色とりどりの賑やかさを持っている。そして月は、変わらず中天に浮かんで静かに光っていた。友町は、まるで音色に吸い寄せられるように、首をのばして倉田の背後をのぞこうとした。

「ああ、よろしいようだ」

倉田が、安心したように言っただけで身体を斜めにひらくと、友町の前にその全貌が現れた。

そこにあるのは、若い頃友町が妻と歩いた夜店の風景。丸くて赤い提灯、色とりどりのランプがはり巡らされて、ずらりと屋台が並んでいる。神社の境内から流れてくる笛や太鼓の音色は楽しそうで、友町のくちびるから、ため息と一緒に咳きか漏れた。

「懐かしいなあ。僕はこの道を、家内と初めて手をつないで歩きました。人が多くて、はぐれちゃいけないと思っただけです。これが、そうですか。家内もこれを歩きましたか」

「それは、あちらでお聞きなさい」

倉田の言葉に、友町は「あつ」と小さな声をあげた。会えるのだと瞬時にして理解し、うれしそうに笑顔になる。が、それはすぐ、微かな不安にとって替わられた。

「あの……。怖いところじゃないでしょうねえ。ほら、極楽だの、地獄だの」

友町の不安を一蹴するように、倉田が明るい笑い声をあげた。

「それは、宗教家の策略だ。ひとはそれを信じているが、この世を生きた者が、死んだあとまで地獄などという場所に送られてはたまらないでしょう。大丈夫ですよ」

それを、友町は信じた。目の前に広がる風景を見れば、信じるほかない。そして妻のそのときはどうだっただろうと足元を見下ろせ

ば、タロウがいかにも誇らしげな姿で尻尾を振り、友町はそれを確信した。

「そろそろ、お逝きになりますか」

倉田の言葉にはつと顔を上げ、友町はゆっくり頷いた。

「参ります」

友町の前を、タロウがためらいのない足どりで、その賑わいの中に入っていく。友町もタロウに連れられて、その中に足を踏み入れた。全身が眩い光に包まれた瞬間、ふつと背後を振り向けば、そこにはもう誰もいなかった。

倉田は、広い国道の交差点のと真ん中に立っている。そこでは、相変わらず信号は黄色い光を点滅させていた。遠くからトラックの近づいて来る轟音がする。つい先ほども、乗用車が一台、不審そうな表情のドライバーを乗せて、通り過ぎたばかりだ。

(行くべき道に、迷える者はいい)

倉田は、思う。これまで、多くの「困っている声」に呼ばれて手助けをしてきたが、一度も彼らが目にしたであろう別世界への入口を、倉田はのぞいたことがない。見えないのだ。一度死んで甦ったときから、倉田は生でも死でもない世界を漂っている存在だった。それをもはや、羨ましいとも妬ましいとも思わないほど、倉田は長く生きている。

(死ぬことがない、というのは、寂しいものだ)

倉田は、声に出さずに呟く。自分と似た者が存在しない世界を、ただ彷徨しなければならぬ運命。それを思えば孤独に包まれる。今夜のように、わざわざ迎えに来てくれるものさえ持たない身思い知らされれば、その孤独は果てがない。このような身にも終わりはあるのか、と想っても答があるかどうかもわからない。わからないまま、倉田が運命を受け入れてからでもずいぶん経っていた。

「それにしても、長い……」

両手を腰にあてて倉田は不満そうに呟き、やっと交差点を渡って

いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896m/>

道ゆき

2010年10月8日13時39分発行